

母語場面と接触場面の会話における話者交替

—話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得—

木暮 律子

キーワード 話者交替、ターン、話し手、聞き手、発話権

1. はじめに

会話は、会話参加者が、話すことと聞くことを交互に繰り返すことによって成立するものである。この、参加者が互いに話を交換する過程は、Sacks et al. (1974) によって研究され、彼らの研究は「順番取りシステム」として、今日でも話者交替研究の基礎となっている。しかし、日本語会話の研究において使われる用語や分析単位は研究者間で異なり、その定義が不十分なことから様々な問題が生じている。

そこで、本稿ではまず、話者交替に関わる概念について整理し、話者交替の単位となる発話を規定する。そして、母語場面と接触場面の会話における話者交替について分析し、日本語学習者の発話権取得を日本語能力との関連において考察する。

2. 調査方法

調査対象者は、ACTFL-OPI¹の初級—上から上級—中レベルにあたる学習者9名と母語話者3名である。調査対象者に対し、親しい日本語母語話者の友人との会話を15分間録音してくれるよう依頼し、文字化した12組、180分のデータを分析のための資料とした。母語話者は、大学・大学院生の20代の女性である。学習者は、名古屋大学の留学生で、国籍や母語、性別は様々である。OPIの判定をもとに、日本語能力が低いと判断される順に並べ、分析の上で日本語レベルとの関連がわかりやすいように、3名ずつ初級、中級、上級の3つのグループに分け、それぞれを1から3の番号によって示した。

表1 日本語学習者の属性

| | OPI判定 | 性別 | 年齢 | 国籍 | 母語 |
|-----|-------|----|----|--------|---------|
| 初級1 | 初級-上 | 男性 | 36 | カメルーン | フランス語 |
| 初級2 | 中級-下 | 男性 | 32 | インドネシア | インドネシア語 |
| 初級3 | 中級-下 | 男性 | 20 | マレーシア | マレー語 |
| 中級1 | 中級-中 | 男性 | 20 | マレーシア | マレー語 |
| 中級2 | 中級-中 | 男性 | 19 | マレーシア | マレー語 |
| 中級3 | 中級-上 | 女性 | 25 | 台湾 | 中国語 |
| 上級1 | 上級-下 | 女性 | 26 | 台湾 | 中国語 |
| 上級2 | 上級-下 | 女性 | 26 | 台湾 | 中国語 |
| 上級3 | 上級-中 | 女性 | 26 | 台湾 | 中国語 |

3. 話者交替をめぐる概念の整理

話者交替を研究する際、最も重要なのは、どこで話者の交替が起こったのかを特定することである。一般に、参加者二人の会話の場合、参加者が交互に「話し手」となり、話者の交替は参加者の間で順番に起こると考えられている。しかし、実際の会話では、複数の参加者が同時に話したり、話しながら聞くということがよくあり、話し手・聞き手という参加者の役割を区別することは容易ではない。

本節ではまず、会話参加者の役割をその場における言語行動によって捉えなおし、話者交替の「話者」とは、どのような言語行動を行う者であるかについて再考する。そして、参加者の役割からその発話の位置付けを行い、話者交替が起こったと見なされる発話について規定する。

3.1 話者交替と会話における参加者の役割

会話参加者によってなされた発話全てが、話者の交替が起こったと見なされるわけではない。次の会話例1でAは、1Bの発話中には、黙って相手の話を聞いているが、3Bでは、発話中に「うん」という発話を挿入しながら聞いている。

会話例1：母語話者3

1B：えー？だってクリスマスと言えばだって、Mとそういう、話をしとっ

たんだって。

2 A : うそー。だけどM用事があるんじゃないの？

3 B : そう。だってM、彼氏がいるんだけどー、(うん。)なんかでも、M卒論やんなきゃいけないからー、(うん。)家にいなきゃいけないじゃん、(うんうん。) そうするとその時期にわたしがいるわけじゃん、
／だから／

このような発話は「あいづち」と呼ばれ、相手の発話の聴取や理解を示すものとして、これまで多くの研究がなされてきた²。あいづちの定義や機能は研究者によって違いが見られるものの、聞き手の行動として研究され、話者の交替が起こったとは見なさないという点では一致している。

このような「発話はあるが、会話における役割は聞き手である」という状態は、次の会話例2の2 B、4 B、6 B、8 Bのようなあいづち以外の発話にも見られる。

会話例2：母語話者2

1 A : そー、10年ぐらいいそうなおばちゃんいるんだよねー。

→* 2 B : うん、いるいる。

3 A : こわくて。(そー、そー、そー。)でも、私って結構ねー、(うん。)なんての？おじさんおばちゃんに好かれる／タイプ？なのね。／

→* 4 B : ／あ、いいねー、／うーん。

5 A : だからね、ほかの子は、怒られてたけどねー、(うん。)なんか、うまくかわしてたみたい。

→* 6 B : あー。なんか、い、それ特だよね。(うーん、そうそう。) うーん。

7 A : なんかねー、と、年寄りじゃないんだけどー、{笑いながら}

→* 8 B : {笑い} キラーだ。

9 A : そー、おじさんとかおばさんとかにねー。(うーん。)じじキラーなのかな、ま、いいんだけどー。({笑い}) 好かれるんだよねー。(うーん。) . . .

それぞれ、先行するAの発話に対し、2 Bは繰り返し、4 B、6 Bは感想、8

Bは先取りを行っている。このような発話は今まで「バックチャンネル+ α 」(伊藤1993)や「あいづち発話」(野畑1996)と呼ばれ³、聞き手が行う言語行動として研究されてきた。しかし、あいづちと話し手の発話の境界に位置するものとされ、話者が交替した単位であるのかどうかについては明らかにされておらず、「聞き手」が話すという状況について話者交替の観点から論じられることはなかった。それは、このような発話はあいづちと違って表現形式が定まっておらず、より積極的に話し手の発話に働きかける実質的な意味内容を含むからであろう。ここでは「聞き手」と見なされる話者の発話についてさらに詳しく見てみることにする。

次の会話例3の2B「ん?」は、先行する発話内容が理解できなかったために行った聞き返しである。

会話例3：母語話者2

1A：・・・わたしもずっといるわけじゃないからー、(うん。)ねえ、(うーん。)後輩にやってもらわないと、そ、育っていかないじゃない? 次の選手が。だからー、(うん。)悪いけどー、(うん。)うん、私もうキーパーやんないからーとか(うん、んー。)言つてー、で、お願いしててー、で失敗だったね。

→* 2B：ん?

3A：だってフィールド出なきゃなんないじゃん。走んなきゃなんないんだよ?(あー、あーあー。{あは})うそーって感じ。ちょっと失敗したけどなー。(うーん。)ま、しょうがないっかーていう感じでー。

2Bの発話は、「で失敗だったね。」という1Aの発話の理由についてさらに詳しい情報を求める発話であり、これに対しAは、3Aで「だってフィールド出なきゃなんないじゃん。走んなきゃなんないんだよ?」と答えている。話し手は相手の発話を無視して会話を進めることができないということから、このような発話は話者が交替したものとして認めざるを得ない。しかし、Bとしては相手の発話内容を理解するために不明な点について質問しただけであり、Aが話し続けることをやめさせようとして発話したのではないだろう。

会話では、相手の発話内容が常に理解できるものであるとは限らないため、聞き手が相手の発話内容について「尋ねる」ということがよく行われる。このような場合、一時的な話者の交替は起きても、その場における話者の役割は依

然として「聞き手」のままであり、参加者の役割の交替は起きていない。したがって、情報提供発話であるか、情報要求発話であるかという発話機能の違いから参加者の役割を規定することはできず、会話参加者の役割の交替と話者の交替とは一致しないということになる。

さらに、このような「理解状況の確認」という行為は、聞き手側が行うだけでなく、話し手が一旦話す順番を渡すことによって、話し手側の方から行う場合もある。次の会話例4でAは、「この間の出来事」というあるまとまった事柄についての情報提供を行っているが、その際、ひと続きの発話によって伝達するのではなく、同意要求発話や上昇イントネーションによって相手の知識の有無を確認しながら話を進めている。

会話例4：母語話者1

1 A：・・・でもさ、こないだこわかったんだけどー、あの、G橋？
あー、G橋、橋が終わってー、あのー土手があるじゃない、こうやって。

→* 2 B：うん。

3 A：そこにねー、左側にー、白いー、あのー、覆面パトカー？

→* 4 B：うん。

5 A：あの、赤いのこうやってのつけてたけどー、覆面パトカーがいてー、で右側にー、普通のパトカーがいるからー、何だろうと思っってそのまま通り過ぎたらー、信号あるでしょ？

→* 6 B：うん。

7 A：信号の左側にー、またなんかミニパトがいるのね。今日は何？
と思っって、

このような場合、Bは何らかの反応を返すことが期待されており、この場でBが発話することは参加者の間で認められていると言える。しかし、Bの発話を見てみると、いずれも「うん」とだけ答え、これ以上の情報提供は行っておらず、すぐにAが引き続き情報を提供していることがわかる。このような状況が成り立つのは、AがBに発話する順番を渡しても、それは一時的なものであり、Aは話し手、Bは聞き手として参加するという認識が、会話参加者のなかで成り立っているからであると考えられる。

会話では、役割に応じた参加の仕方があり、我々は、その場の状況を瞬時に判断しながら期待された役割や言語行動を行い、会話を成り立たせている。し

たがって、このような点を無視して会話における参加者の役割を規定することはできず、話者交替を研究する際にも、参加者の役割からその発話の位置づけを行う必要がある。従来の研究にはこのような視点が欠けており、Sacksらの研究の「turn-taking」という用語を「話者交替」や「発話順番」、「発話権の移行」と訳して用いていたが、これが何の交替、順番を指すのか、参加者の役割や発話内容を考慮に入れて定義しているものは見当たらない。また、「発話順番」という用語が「発話権」と「発話内容」という異なる概念を示すものとして使われているという問題も見られた⁴。

3. 2 本研究における定義と分類

3. 2. 1 用語について

本研究では、以上のような問題を踏まえ、「turn-taking」の訳語として「話者交替」という用語を用い、これを「会話において話をする者がかわっていく過程」と定義する。そして、「話をする者」のなかには、「聞き手」も含めることにするが、聞き手行動である「あいづち」は話者の交替が起こったとは認めない。また、「会話における話者交替の単位で、一人の会話参加者が話し始めてから話し終えるまでの発話」を「ターン」、「会話参加者が発話のやり取りを交わす際の話す順序」を「発話順番」と呼び、両者を区別する。なお、会話における参加者の役割について、「話し手」は、「話題に関する内容を話したり、現在の話をさらに展開させていく行動をとる会話参加者」、「聞き手」は、「相手の発話を聞く作業を中心として、その発話を理解するための行動をとる会話参加者」と定義する。

次に、発話の分類とその認定基準について、話者交替の観点からさらに詳しく説明する。

3. 2. 2 発話単位について

まず、発話⁵を「ターン」と「あいづち」とに分ける。「あいづち」は、話し手の発話に対する理解のみを示すもので、「はい」「ええ」「うん」「そうですか」「そうですね」など表現形式が定まっている発話である。これには、「へー」、「うそー」、「ほんとう」などの感嘆表現や非言語行動の笑いも含める。

| | | | |
|----|---|------|--|
| 発話 | { | ターン | ：会話における話者交替の単位で、一人の会話参加者が話し始めてから話し終えるまでの発話 |
| | | あいづち | ：話し手の発話に対する理解のみを示す、表現形式が定まっている発話 |

次に、「ターン」を参加者の会話における役割によって、「話し手ターン」と「聞き手ターン」とに分ける。「話し手ターン」とは、会話の進展に寄与する発話で、話題に関する情報の提供や話を展開させていく情報の要求を行う発話である。一方、「聞き手ターン」は、話し手への反応を示す、表現形式が不定の発話で、これは、先行する発話の繰り返しや言い換え、先取り、感想、情報の補足など話し手ターンに直接関与する内容について述べるものである。また、発話順番を奪うためではなく、先行発話を理解するために行った確認要求や説明要求も、話し手ターンに従属するものであることから、聞き手ターンとして扱う。

| | | |
|-----|---|---|
| ターン | { | 話し手ターン：話し手が行う発話で、話題に関する情報の提供や話を展開させていく情報の要求を行う発話。 |
| | | 聞き手ターン：話し手への反応を示す、表現形式が不定の発話。先行する話し手の発話に対する理解だけではなく、話し手発話に直接関与する実質的な内容を含むが、話の展開に寄与するようなものではなく、話し手発話に従属する。 |

このうち、話者が交替したと認める発話単位は、話し手ターンと話し手ターンとのやりとり、或いは話し手ターンと聞き手ターンとのやりとりである。なお、話し手ターンの場合には、その場において話し続けることが参加者の間で認められているということから、本研究では、「話し手としてターンを取り、話をする権利」を特に「発話権」と呼ぶことにする。

以上、話者交替に関わる用語および分析単位の整理を行った。次節では、このような基準に従って、母語場面と接触場面の会話における発話権の取得について分析する。

4. 会話における発話権の取得

4.1 発話権取得の頻度

会話において、話者の交替はどの程度起きているのだろうか。総ターン数及びターンの内訳から、発話権取得の頻度について見ていくことにしよう。次の表2は、会話において何回発話権を取得したのか、話し手ターン数及び総ター

ンに占める話し手ターンの割合を示したものである⁶。

表2 母語話者のターンの内訳と発話権取得の割合

| | 話し手ターン数 | 聞き手ターン数 | 総ターン数 |
|-----|--------------|--------------|-------|
| 母語1 | 79 (88.8%) | 10 (11.2%) | 89 |
| 母語2 | 75 (79.8%) | 19 (20.2%) | 94 |
| 母語3 | 114 (92.7%) | 9 (7.3%) | 123 |
| 合計 | 268 (87.6%) | 38 (12.4%) | 306 |
| 平均 | 89.3 (87.6%) | 12.7 (12.4%) | 102.0 |

この表を見ると、総ターン数は100前後、発話権の取得は80回程度行われており、総ターン数に占める話し手ターン、聞き手ターンの比率は、平均でおよそ9:1の割合になっていることがわかる。

それでは、学習者の場合はどうであろうか。次の表3で、まず、総ターン数を見てみると、初級1の学習者のターン数が177と他の学習者に比べ、かなり多くなっていることが注目される。初級1の学習者のOPIにおける判定は初級の上であるが、初級2・初級3の学習者は、中級の下にあたる。OPIの判定尺度において、初級は「単語人間」、中級は「文人間」と呼ばれ⁷、テキストの型の違いが評価基準として提示されている。1発話内の構成が語から文へと長くなれば、同時内におけるターン数も少なくなることが考えられる。したがって、このレベルの学習者に見られるターンの多さは、おそらく1ターン当たりの発話量の少なさ、つまりターンの短さに起因するものであろう。

表3 学習者のターンの内訳と発話権取得の割合

| | 話し手ターン数 | 聞き手ターン数 | 総ターン数 |
|-----|--------------|------------|-------|
| 初級1 | 172 (97.2%) | 5 (2.8%) | 177 |
| 初級2 | 116 (100.0%) | 0 (0.0%) | 116 |
| 初級3 | 85 (100.0%) | 0 (0.0%) | 85 |
| 中級1 | 90 (93.8%) | 6 (6.3%) | 96 |
| 中級2 | 125 (96.9%) | 4 (3.1%) | 129 |
| 中級3 | 75 (84.3%) | 14 (15.7%) | 89 |
| 上級1 | 90 (94.7%) | 5 (5.3%) | 95 |
| 上級2 | 62 (72.9%) | 23 (27.1%) | 85 |
| 上級3 | 92 (86.8%) | 14 (14.7%) | 106 |
| 合計 | 907 (92.7%) | 71 (7.3%) | 978 |

次に、ターンの内訳を見てみると、初級学習者は、話し手ターンの取得回数が多く、聞き手ターンの割合が非常に少なくなっていることがわかる。

伊藤（1993）は、本研究の聞き手ターンにあたる「バックチャネル+ α 」という表現形式を、「聞き手に止まる「相づち的な発話」から一歩踏み出し、話順を取って話し手に交替し、「実質的な発話」に移行させていく発話の形式」（p.82）と捉え、発話権を取得できるようになるためには、まず、聞き手としてあいづち以外の形式で会話に参加できるようになることが必要であると述べている。しかし、初級学習者において、聞き手ターンがほとんど見られないことから、日本語能力が低い段階では、聞き手ターンの取得が話し手ターンの取得よりも難しいということが窺え、日本語能力の向上に伴い、次第に聞き手としての参加の仕方を身につけていくのではないかと考えられる。

さらに、ここで、学習者の会話相手である母語話者のターン取得状況についても調べてみたところ、そのターンの割合は学習者の日本語能力レベルによって違いが見られることが明らかになった。次の表4は、接触場面の母語話者が取得したターンの内訳を示したものである。

表4 接触場面の母語話者のターンの内訳⁸

| | 話し手ターン数 | 聞き手ターン数 | 総ターン数 |
|---------|-------------|-------------|-------|
| 初級1母語話者 | 138 (72.3%) | 53 (27.8%) | 191 |
| 初級2母語話者 | 78 (67.2%) | 38 (32.8%) | 116 |
| 初級3母語話者 | 75 (84.3%) | 14 (15.7%) | 89 |
| 中級1母語話者 | 69 (72.6%) | 26 (27.4%) | 95 |
| 中級2母語話者 | 85 (62.5%) | 51 (37.5%) | 136 |
| 中級3母語話者 | 73 (80.2%) | 18 (19.8%) | 91 |
| 上級1母語話者 | 85 (92.4%) | 7 (7.6%) | 92 |
| 上級2母語話者 | 80 (94.1%) | 5 (5.9%) | 85 |
| 上級3母語話者 | 99 (93.4%) | 7 (6.6%) | 106 |
| 合計 | 782 (78.1%) | 219 (21.9%) | 1001 |

表2で示したとおり、母語場面における聞き手ターンの割合は、総ターンの1割程度であった。しかし、この表を見ると、初級1から中級3の学習者の会話における母語話者の聞き手ターンの割合は、2～3割であり、母語場面における取得割合よりも多くなっていることがわかる。

深沢（1998）は、母語場面と接触場面で見られる割り込み発話について分析し、接触場面の母語話者は会話の管理や調整の機能を持つ割り込み発話をよく

用い、学習者が上手な「話し手」となるように支援する「聞き手」となっていると述べているが、この、学習者を支援する「聞き手」としての行動が、日本語能力が低い学習者との会話における母語話者の聞き手ターンの多さにも現れているものと思われる。以下に、日本語能力が低いレベルの学習者の会話において、母語話者が行った聞き手ターンの例を挙げる。

次の会話例5の1 NNSから9 NNSまでの学習者の発話は、通常、1つのターンで言い終えることができるひとまとまりの内容を伝える発話である。しかし、一文を言い終えるまでに、5回の母語話者による聞き手ターンが介入している。2 JNSと4 JNSは助詞、6 JNSは時制、8 JNSは発音の誤りをそれぞれ訂正しており、最後の10 JNSでは、発話内容の確認を行っている。

会話例5：初級学習者1

- 1 NNS：授業とか、(ん、ん。) あの一、オッ、オック、あの一、
surveyをしました。(うん。) erm、朝ご飯食べま、食べて一、
(うん。) ん一、[3.2] 教科書とか一、(ん。) 辞書一、あ
の一、かばんの中に入れ、
- * 2 JNS：入れ／て／？
- 3 NNS：／い／れ、いれ、入れて、あの一、[3.4] はっち時一、ん一、
30分ぐらい、erm [4.7] ん一、[3.4] 名大、(ん。) 名大一、
- * 4 JNS：名大一／に／？
- 5 NNS：／で／？名大に、あ一、来ま [す]。
- * 6 JNS：来ました。
- 7 NNS：来ました。(ん。) ん一。[2.0] あの一、erm、[2.5] あ一、
あす、あすく一、なりませんです。／あ／
- * 8 JNS：／あ／つく、
- 9 NNS：暑く／なりませんでした。／
- * 10 JNS：／暑くなりま／せんでした？
- 11 NNS：ええ。(ん一。)

次の会話例6、7でも、このような聞き手ターンが見られ、母語話者が学習者の発話途中で日本語の問題を察知し、先取りするかたちで学習者の言いたいことを代弁していることがわかる。

会話例6：初級学習者1

1 J NS : 12階だといろいろ見えるでしょう。／外が一／、見えるね、
You can see.

2 NNS : ／みえ／、

3 NNS : 見える。(／んー。／) ／あーあ／、er、いえ、12、er12階
でー(んー。)erいろいろ、えー、(うん。)いろ、いろいろ
な(ん。)ところ(うん。)erみえ、みえ、み、

→* 4 J NS : 見えた？

5 NNS : 見えた。(ほーんとう。)はーい。

会話例7：初級学習者3

1 J NS : ふーん、じゃ四人で集まる時はいつも、NNSさんがご
飯をつくるの？当番はあるの？こう。

2 NNS : えっへへ。(ふふ。)うーん、あー、(うん。)当番、当番は、
えー(うん。)毎晩一緒に集まることは(うん。)ないけどー、
(うん。)ときどき、やります。だから、(うんうん。)ほか
の、とき、ほかのー、とき、(うん。)ほかの人が、／er／

→* 3 J NS : ／ああ／、ほかの人が作る時もある。

4 NNS : うんうんそうそうそうそう。

日本語能力が低い学習者の会話で見られたこのような例は、いずれも、学習者の発話権を奪うためではなく、その発話を理解し、学習者を助ける目的で行った行動と解釈することができる。日本語能力が低いレベルの学習者で、発話権取得率が高いのは、会話相手である母語話者がこのような聞き手ターンによって学習者が話しやすいように援助していることも影響していると考えられる。

一方、次の会話例8、9、10は、上級学習者の会話において見られた母語話者の聞き手ターンである。これらは、学習者の発話を理解するためというよりも、共感や同意を示すためのものであり、日本語能力が低い学習者の会話で見られる聞き手ターンと比べ、明らかに質的な差が認められる。

会話例8：上級学習者1

1 NNS : あのー、(うん。)T子のー、実家は(うん。)旅館やってる

よ。

→* 2 JNS : あ、ほんとう。へえー、(ふふふ。) すごいね。ふーん。

会話例 9 : 上級学習者 3

1 JNS : あ、今はね、どっちかっていうと和菓子のほうがね、好き。

2 NNS : あ、歳をとると / [笑い]、和菓子、どうし / て? あははは。

→* 3 JNS : / あはは、え、そうかもしれない。 /

会話例 10 : 上級学習者 3

1 NNS : うん、上級の日本語会話。(ん。) N先生の、あの、うちも、(うん。) あ、実家、のほうですね、(/ うん。 /) / お寺。 /

→* 2 JNS : あ、お寺は大変だよな。

以上、総ターン数に占める話し手、聞き手ターンの割合から、ターン取得状況の変化について述べた。次節では、聞き手はいつ、どのようにして相手の発話を受け継ぎ、話し手となるのか、話者交替ルールから見た発話権取得のきっかけについて見ていくことにする。

4. 2 発話権取得のきっかけ

4. 2. 1 話者交替ルールと発話権の取得

Sacks et al. (1974) によって提示された「話者交替ルール」を簡略に示すと、次のようになる。

(1 a) : 今の話し手が、次の話し手を選択する。

(1 b) : 今の話し手が、次の話し手を選択しない。

(1 c) : 今の話し手が、次の話し手を選択せず、また他の参加者も話し出さない。

このルールを、ターンを取得する者の立場から考えると、これは、「ターン取得のきっかけとなった状況」と解釈することができ、次のように捉えなおすことができる。

- (1 a) —他者選択：相手からターンをもらう
 (1 b) —自己選択：自らターンを取る
 (1 c) —交替なし：現在の話者が引き続き話し続ける

図1 ターン取得のきっかけの分類

Sacksらは、この3つの規則の間には優先順位があるとし、(1 a) → (1 b) → (1 c) のサイクルで話者の交替が繰り返されると主張している。しかし、話者交替ルールは、会話において発話の重なりや不自然な沈黙が少ないという観察の結果を説明するために考え出されたものであり、実際の会話では、発話の重なりや割り込み現象が見られ、話者交替は比較的自由に行われている。このことは、ターンの取得が、次の話者の判断や選択に任されている面もあり、次に話者となる者の意思や自主性も尊重されるものであることを意味している。よって、本研究では、ターンの取得が先行話者の発話に完全に依存し、他者選択が起こらなかった場合に自己選択が生じ、それも起こらなかった場合に現在の話者が話し続けるというようなサイクルとして話者交替ルールを捉えるのではなく、あくまでもターンを渡す側と取る側の両者の主体性が反映された相互作用の結果であると捉え、この3つを対等に扱い、分析していくことにする。

4. 2. 2 発話権取得のきっかけの割合

それでは、この3つの状況による発話権の取得が、会話においてそれぞれのくらい見られるのか、発話権取得のきっかけについて見ていくことにしよう。次の表5は、母語話者の発話権取得のきっかけとそれぞれの話し手ターンに占める割合を示したものである。

表5 母語話者の発話権取得のきっかけ

| | 他者選択 | 自己選択 | 交替なし | 話し手ターン数 |
|-----|--------------|--------------|------------|---------|
| 母語1 | 27 (34.2%) | 50 (63.3%) | 2 (2.5%) | 79 |
| 母語2 | 25 (33.3%) | 46 (61.3%) | 4 (5.3%) | 75 |
| 母語3 | 34 (29.8%) | 80 (70.2%) | 0 (0.0%) | 114 |
| 合計 | 86 (32.1%) | 176 (65.7%) | 6 (2.2%) | 268 |
| 平均 | 29.7 (33.3%) | 57.7 (64.6%) | 2.0 (2.2%) | 89.3 |

この表から、発話権の取得は3名の母語話者とも、自ら発話権を取る自己選択によるものが6割を占めて最も多く、相手から発話権をもらう他者選択による取得は3割と、自己選択による発話権の取得の半数程度であることがわかる。また、話者が交替しない発話権の取得はほとんど見られず、その選択割合は、自己選択>他者選択>交替なしという順序になっている。

一方、学習者の発話権取得のきっかけについて、次の表6を見ると、母語話者同様、話者が交替しない発話権の取得はほとんど見られないという点では、すべての学習者で一致しているものの、他者選択と自己選択による発話権取得の割合は、学習者によって異なっていることがわかる。

表6 学習者の発話権取得のきっかけ

| | 他者選択 | 自己選択 | 交替なし | 話し手ターン数 |
|-----|-------------|-------------|-----------|---------|
| 初級1 | 121 (70.3%) | 50 (29.1%) | 1 (0.6%) | 172 |
| 初級2 | 63 (54.3%) | 48 (41.4%) | 5 (4.3%) | 116 |
| 初級3 | 58 (68.2%) | 27 (31.8%) | 0 (0.0%) | 85 |
| 中級1 | 42 (46.7%) | 47 (52.2%) | 1 (1.1%) | 90 |
| 中級2 | 100 (80.0%) | 24 (19.2%) | 1 (0.8%) | 125 |
| 中級3 | 25 (33.3%) | 49 (65.3%) | 1 (1.3%) | 75 |
| 上級1 | 27 (30.0%) | 57 (63.3%) | 6 (6.7%) | 90 |
| 上級2 | 10 (16.1%) | 52 (83.9%) | 0 (0.0%) | 62 |
| 上級3 | 17 (18.5%) | 73 (79.3%) | 2 (2.2%) | 92 |
| 合計 | 463 (51.0%) | 427 (47.1%) | 17 (1.9%) | 907 |

初級学習者3名と中級2の計4名の学習者は、他者選択によって発話権を取得することが自己選択による取得よりも多くなっている。中級1の学習者においては、他者選択と自己選択の割合の差はほとんど見られないが、自己選択による発話権の取得が他者選択による発話権の取得を上回っている。一方、中級3以上の学習者では、自己選択による発話権の取得が圧倒的に多くなっており、中級3と上級1の学習者では、自己選択による取得が他者選択の2倍と、母語話者同様の結果になっていることがわかる。上級2と3の学習者では、さらにその差が増加し、自己選択による取得が8割を占め、他者選択による取得の4倍になっている。

以上の母語話者、学習者の話し手ターンに占める発話権取得のきっかけの割合をグラフで示したのが次の図2である。

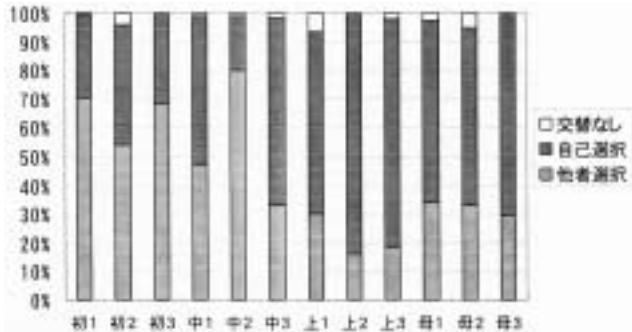


図2 話し手ターンに占める発話権取得のきっかけの割合

この図を見ると、全体的に、日本語能力が低いレベルの学習者では、他者選択による発話権の取得が多く、その割合は話者交替ルールの優先順位と同じ、他者選択>自己選択>交替なしという順序になっていることがわかる。そして日本語能力のレベルが上がるにつれて、他者選択から自己選択に移行していく傾向にあることが窺える。

話者交替は、会話参加者双方の相互作用によって選択、決定されるものであり、今回の分析結果が先行発話の発話機能の違いによるもの、つまり会話相手のターンの終わらせ方によるのか、発話権を取得する側の自主性の現われなのか、どちらに起因するものであるかを特定することは難しい。それは、前述したとおり、発話権の取得が先行発話と重なる場合があり、自己選択であれば先行発話が情報提供機能をもつ発話であるとは必ずしも言えないからである。しかし、他者選択による発話権の取得の場合には、必ず先行発話が要求機能を持つ発話であるということを考慮に入れると、日本語能力が低い段階で見られる他者選択による発話権取得の多さは、会話相手である母語話者側のターン終了方法の配慮と捉えることができる。

学習者の日本語能力が低い接触場面の会話では、会話相手である母語話者が発話順番をうまくリードしながら学習者が話し手となる機会を与えており、このように発話権の取得が先行発話の発話機能に依存している段階では、実際の会話における発話権取得のきっかけの割合も、話者交替ルールの優先順位どおり、規則的に働くと考えられる。そして、発話権の取得に学習者の自主性が現われるようになるのは、日本語能力が向上し、言いたいことを言いたいときに言えるようになったときであり、学習者の発話権取得のきっかけは、他者選択に頼った受動的な取得から、自己選択によって取得していく能動的な取得へと変化していくと言うことができる。

5. まとめ

以上、本稿では、話者交替をめぐる概念を整理したうえで、母語場面と接触場面の会話にける発話権取得の実態について見てきた。日本語能力が低い段階では、発話権取得の割合が多いものの、母語話者側に学習者を助ける聞き手ターンが見られたり、ターンの渡し方に配慮が見られ、発話権の取得が母語話者によって管理されていると言える。そして、日本語能力が向上するにつれ、聞き手ターンや自己選択による発話権の取得が増えることは、学習者自身が、自主的に発話権を管理できるようになったことの現われであると解釈することができる。

今後は、母語場面と接触場面の母語話者でターンの終了方法に違いが見られるかどうか調べるとともに、フォローアップインタビューを実施し、接触場面性に対する参加者の意識が分析結果にどのようにかかわっているかについて明らかにしたい。

注

- 1 ACTFL-OPIとは、American Council on the Teaching of Foreign Languages-Oral Proficiency Interviewsの略で、全米外国語教育協会の方式によるインタビュー形式の口頭表現能力試験のことである。
- 2 日本語会話におけるあいづちに関する研究には、黒崎(1987)、水谷(1988)、堀口(1991)、メイナード(1993)、今石(1993)等がある。
- 3 伊藤(1993)は、「バックチャネルに簡単なコメントや短い発話を加えた形式」を「バックチャネル+ α 」、野畑(1996)は、「実質的な内容を含む聞き手の相づちな発話」を「相づち発話」と呼んでいる。
- 4 例えば、内田(1999)では、話者交替の単位である「話順」が「参加者のうちの1人が話す権利とその人の発話内容の双方を含むもの」と定義されている。
- 5 本研究では、「発話」を「一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続で、音声的、統語的なまとまりによって区切られるもの」と定義する。1つのターンは、1つ以上の発話から構成される。
- 6 本稿の比率は、小数第二位を四捨五入して計算したもので示す。そのため、 $\pm 0.1\%$ の誤差が生じる場合がある。

- 7 OPIでは、被験者が作り出す発話の量的、構成的側面を「テキスト」と言う。テキストの型は、初級では単語あるいは句であり、中級では単文または2、3の連文となることから、このように呼ばれている。
- 8 参加者2人の会話では、通常、話者交替が交互に起きるため、ターン数は両者でほぼ等しくなるのが普通である。しかし、本研究では、聞き手ターンを認定し、話し手ターン中に重なる発話や割り込み発話、同時発話によりどちらか一方が途中で話すのをやめた発話などもターンと認めたため、参加者間（接触場面の学習者と母語話者）のターン数が一致しないことがある。

会話例における使用記号

収集した会話資料は、ターンを単位として文字化し、ターンごとに発話者記号をつけて記した。使用した表記上の記号は、以下のとおりである。

| | | | |
|-------|------------------|-------|------------|
| / / | 発話の重なり | [] | ポーズの長さ |
| [] | 記録上不明瞭な発話 | [・] | 不明瞭な発話の一拍分 |
| ? | 上昇イントネーション | , | ごく短い沈黙 |
| 。 | 下降イントネーションで文が終了 | { } | 非言語的な行動 |
| () | あいづち | * | 聞き手ターン |
| A | 母語場面の会話における調査対象者 | B | 会話相手 |
| J N S | 接触場面の会話における母語話者 | N N S | 日本語学習者 |

引用文献

- 伊藤博子 (1993) 「談話の指導—バックチャネルからの展開—」『日本語学』12巻9号 明治書院 pp.78-91
- 今石幸子 (1993) 「聞き手の行動～あいづちの規定条件～」『阪大日本語研究』5 大阪大学文学部日本学科言語系 pp.95-109
- 内田らら (1999) 「話者交替が果たす機能とは:メタコミュニケーションからの日英語比較」『第3回社会言語科学会研究大会予稿集』 pp.102-107
- 黒崎良昭 (1987) 「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150 国語学会 pp.15-28

- 野畑理佳 (1996) 「対話における聞き手の言語行動—相づち的な発話による聞き手の参加—」『平成8年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.127-132
- 深澤のぞみ (1998) 「異文化間コミュニケーションにおける日本語母語話者の役割—割り込み発話時の視線行動の観察からわかること—」『平成10年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp.51-62
- 堀口純子 (1991) 「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』第10巻10号 明治書院 pp.31-41
- 水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』第7巻13号 pp.4-11
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff and Gail Jefferson (1974) 'A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation.' *Language* 50 pp.696-735